

第11回「関西建築家新人賞」審査講評

審査員長 / 竹原 義二 Yoshiji Takehara

関西建築家新人賞は今回で11回目になる。賞が社会的に認知され、新人賞としての格付けができあがってきた。今回の審査員長は生山雅英氏が選任され、満田衛資氏、小川重雄氏の三名が審査にあたることになっていた。が、書類審査直前に生山氏の容態が悪化し、審査続行が不可能になったため、表彰委員会で審査員長の交代を協議した。その結果、本委員会の委員長である竹原義二が選任され交代をした。今回は19作品の応募があった。新しい会員の作品が6作品あり、いままではひと味違った作品が出そろった。書類審査では3者の建築への視点がそれぞれ違うなかで議論を重ねた結果、6作品を現地審査することになった。いずれもレベルの高い作品である。

中西ひろむ氏の「象の家」は三方を擁壁に囲まれた窪地のなかに建つという厳しい環境を逆手にとって、場を生かすことに成功している住宅である。

家型に切り取られた東側の外観は写真を見た限りでは少し奇抜な印象を持った。しかし実際に訪れてみると、隣家との関係性や路地からのアプローチという条件の読み解きが、この形態に変換されていることを感じた。

この家の見所は中庭のあり方にある。ロの字平面の外側の余白と中庭の余白が二重の入れ子構造になり、回遊することで空気は中庭を通り抜けていく。この巧みな空間の処理が住むことの楽しさを生み出している。

玄関から内部へ回り込むと中庭が現れる。家型の下に展開された2つの領域は、その天井の高低差によって中庭を囲む壁面にリズム感を与えている。中庭を挟んで配置された領域は、思い切り低く押さえ込まれた天井高さが外と内の関係を巧みに操作し、小さな空間に緊張感を生み出すことに成功している。穿たれた開口部から差し込む光影は空間に柔らかく溶け込んでいる。また住み手が持ち込んだインテリア家具が空間における色合いとうまくマッチしている点も魅力的である。

小粒だが、隙のないデザインと丁寧な納まりが隅々まで行き渡った、住む人の気持ちを豊かにする秀逸な作品である。

石倉康平氏の「槇塚台の家」はニュータウンのなかに建つ住宅の建て替えである。35年の歳月がたつと周辺は緑で覆われ、一定の環境が整ってくる。ひな壇の敷地形状の生かし方と建築のボリュームの解き方が明快な建築である。

前面道路に面する立面は低く抑えられ、街並に溶け込んでいる外観は好感が持てた。

掘り込まれた玄関から内部へ入り込むと、ひとつの階段に出会う。この場所がこの家の要であり、空

間が程よい距離感を醸し出す役割を担っている。つなぎの間として中間的な領域を構成し、木造で現した軸組がそれぞれの場へと緩やかに続く。レベル差を解消しながら一室の空間として全体をつなぎ止めている。

場を読み解き、住み手の生活を丁寧にデザインすることで普通性を高めたこの家は、時間がたつほどに味わい深くなる秀逸な作品である。

木村吉成氏の「house T/ salonT」は図面と写真から受けた印象はとても魅力的であった。建築家とクライアントとの関係も密であることが伺われた。

この建築は、木構造の柱と開口部(サッシ)だけで構成した挑戦的な建築である。現地でその空間の使われ方を見たかった。

場に立つと建築の存在感が強過ぎたのか、住むことが希薄に見えた。内部と外部が一枚の布で隔てられ、建築の構成に反して風景の中に溶け込むことを拒んでいるように思えた。それによって環境・建築・生活の関係性が見いだせなかったのは残念である。

三宅正浩氏の「浮きヤネの家」は郊外住宅地に新しい感覚を持ち込んだ意欲的な建築である。周囲からの視線を考慮するために、壁には開口部を設けず上部のハイサイド窓で処理がされている。中庭により2分割された部屋の上にもうひとつの大きな屋根をかけ、上下の屋根の隙間から光や風を取り入れる仕掛けがほどこされているのだが、入れ子で収められた下屋根のポリカ波板の納まりは美しく見えなかった。コンセプトが先にあり、空間の納まりが後手にまわったのか、納まりきらない箇所が目についてしまった。うまいだけに残念である。

梅原悟氏の「北白川の角家」は景観条例を持つ地域に建っている。ここでは屋根の形を切妻屋根にすることが求められていることに対し、新しい屋根の型を提案している。対角線上に稜線を持つ、変形片流れ屋根である。しかし道路側から見ると軒裏空間の存在が大きく建築が周辺よりも少し大きく感じられた。内部の空間は二層分のレベルを一室空間として納めているので空間に広がりを感じたが、連続感がありすぎるために場の個性が見つけられなかった。シンプルな白い一室空間にまとめるのは常套手段であり、もう一步踏み込んで欲しかった。

岸本貴信氏「蔵の家」は重要伝統的建造物群保存地区のすぐ近くに建つ、建築のあり方を問い直した意欲作である。土蔵の存在に着目し、妻側の壁を構造壁とすることで、桁行方向を全面開放することを可能にしている。3つのボリュームに囲まれた妻壁のなかに生まれた空間は、新しい住まい方を提案している。家形を持ったシンプルな外観は集落の中に溶け込んでいただけに、現地審査で内部がみえず室内の空間を確かめることができなかったのは残念であった。

審査員 / 小川 重雄 Shigeo Ogawa

写真家の視線で価値判断すること。それが今回の私の役目だと思いました。

私が建築を撮影する際に最も配慮している事は、「その空間に行ってみたくなるように」撮る事です。それはすなわち、その建築でもっとも居心地の良い場所を探して、そこにカメラを構える事なのです。今回の新人賞現地審査では、その「最も居心地の良い場所探し」をしました。

「象の家」

木が1本だけ植えられたコンパクトな中庭がとても効いています。

どの部屋からもこの中庭が眺められ、視線が自然に中庭の緑へ誘われます。

例の「最も居心地の良い場所」は、ダイニングテーブルを囲む椅子でした。アップダウンする屋根形状がそのまま現れた天井は、ほどよい囲われ感と開放感を生んでいます。

そのスケール感の抑揚の巧さに感じ入りました。様々な色彩をもつ多様な素材も、適材適所に使いこなされていて、お施主様の所有される個性的な家具と見事に調和していました。

三方を擁壁に囲まれた窪地のような敷地なので、周辺からは特徴的なギザギザの山形屋根が印象的に見下ろせます。苦言を呈するとすれば、アプローチからは側面の素っ気ない外観がわずかに見えるだけで、この辺りの造形にもう少し工夫があっても良かったかもしれません。

「榎塚台の家」

この住宅には「居心地の良い場所」がいくつかあります。

一つ目は、玄関を上がって最初に目にする階段スペースです。

中庭を背景として緩やかに空間をつなぎ、階段を上下する人の視線に喜びを与えてくれます。

その階段を登りきったところにある子供部屋は、二つ目の「居心地の良い場所」です。

ダイナミックな屋根架構が間近に迫り、お子さん達が喜びそうな隠れ家的なロフト空間を構成しています。

三つ目の「居心地の良い場所」は、駐車スペースを稼ぐために床レベルから僅かに持ち上げられた畳敷きの空間です。両側を開口部に囲まれ、天井高を抑えたこの居間スペースは、絶妙なスケール感と視線の抜けを有してこの住宅の中心になっていました。ただ、このメインの居間空間と中庭の繋がりが上手く構成されていないのが少し残念でした。

以上二つが強く印象に残った建築です。

ともに住宅の実作は2件目という30代半ばの若い建築家の作品ですが、良く練られた設計は他の作品から抜きん出るものでした。

この作品を生み出した中西さんと石倉さんが新人賞にふさわしいと思います。

審査員 / 満田 衛資 Eisuke Mitsuda

現地審査においては、建築の「かた」として何を採用あるいは発明し、それが「かたち」として結実させる上でどれだけ貢献できているか、ということに注目した。以下、当日巡った順に講評を述べる。

「象の家」は、窪地的な悪環境に対し中庭を囲う口の字プランで応じた作品である。加えて屋根勾配を操作することで中庭を囲う四方の室それぞれに特徴的な天井高さを用意し、同時に、各室に特徴ある色を一つずつ与え、中庭に対し多彩な関係を築きながら一つの建物として統合させる。ひとつひとつの建築的操作がどれも住まい手の暮らしぶりに合っており、上手さを感じさせる爽やかな作品であった。

「北白川の角家」は、2階主空間の居心地がとても良かった。抜けの良い主空間を実現するために鉄骨造が採択されたとも言えるが、翻って内外をつなぐバルコニーや外観の作られ方は、内部とは独立した別の論理のようにも感じられた。結果的に周辺環境に対し少なからず異質さを感じてしまったのも事実である。

「house T / salon T」は、建物の構成面で最も意欲的で、「かた」の発明という点では全応募作品の中で抜きん出ていると思う。議論の過程においては受賞に手が届いていた場面もあった。「かた」を「かたち」へと結実させるにあたり、コストの厳しさによる建築家としてのデザインの詰め切れなさ（住まい手への委ね方）が少なからず影響を及ぼしていたのが惜しかった。

「浮きヤネの家」は、構成原理が明快なだけに、それが実空間としてどのように機能しているかがポイントであった。気持ちの良い空間が随所にある反面、経年変化の大きい木造に対しディテールが大味に感じられ、様々な面で建物に負荷をかけ過ぎているように感じた。2年後にもう一度この審査の場に立つことで、設計の正しさが証明されることに期待したい。

「槇塚台の家」は周辺環境と最も調和できていた作品であった。床レベルの操作を核に、屋根勾配やボリュウム配分など建築的な基本操作を丁寧に繰り返すことで、まちなみに上手く溶け込んでいた。内部空間もまたレベル差を活かした構成で、エントランスでは視線が自ずと上を向くこととなるのだが、様々なレベルにある表しの屋根梁が空間全体を包み込んでおり、木という素材を活かした暖かみのある空間を実現していた。

「蔵の家」は、3スパンの木質ラーメンで明快に構成した点に大いに興味をもったが、審査当日の内見不可が残念だった。直方体に切妻屋根が乗る単純な形態や真白な壁面に対し「鉄骨造であったならばここまでの評価がなされたか？」と外観を眺めながら感じたのだが、それを覆すためにもやはり内部空間を体験してみたかった。

（補足）筆者が具体的に構造設計で関与した作品に対しては1次審査において投票してはいけない、ということが審査に先立ち委員間で決められていたことをここに補記しておく。